

# デイヴィッド・ルイスの様相の形而上学<sup>1</sup>

## On D.Lewis' Metaphysics of Modality

文学研究科人文学専攻博士前期課程修了

片 岡 優

Yu Kataoka

### はじめに

デイヴィッド・ルイス (David Lewis:1941-2001) は、論理学上の自分自身の成果を受けて、不動の形而上学者になった。あるいは形而上学的意図を持って、その論理学——対応者理論 (counterpart theory) ——を展開した。

30年以上に及ぶキャリアの中で、彼の論理学内部における業績はさほど多くない。しかし様相実在主義 (modal realism) というその形而上学的主張は、彼自身が1968年に発表した一つの論理的な技術に対する哲学的側面からの擁護に収斂しているのである。そして論理的手法という武器が、一層、彼をして形而上学の領域へ踏み込ませたように見える。

本稿では、ルイスの主張する様相実在主義なる形而上学を検討していく。まず様相実在主義を下支えする、あるいはそれから派生すると考えられる対応者理論の基礎概念を見ておき、次いで彼の可能世界概念を考察する。対応者理論に関しては「現実性」の把握を巡って、また可能世界についてはそれらが「重なり合う」という「再結合の原理」を巡って、いずれも困難を抱えることが明らかになるだろう。

### I. 対応者理論の論理的表現力

#### 1. 対応者理論の基礎概念

ルイスは可能性や必然性を原初的な概念として認めない。従って、様相オペレーターを伴わない言語で、その表現を獲得しようと試みる。彼は1968年の論文<sup>2</sup>において、通常の述語論理に幾つかの補足を加えることで、様相についての表現を与えられると主張した。その際導入する述語は、以下の4つである。

$Wx$  (xは可能世界である)

$Ixy$  (xは可能世界yの中にある)

$Ax$  (xは現実である)

$Cxy$  (xはyの対応者 counterpartである)

ルイスに従えば、わずかこれだけの述語で、様相概念を含む言明を形式化できるのである。ここには「可能的に」や「必然的に」といった様相を語る副詞・オペレーターは現れていないことに注意したい。

クリプキ・モデルにおいては、例えば、「必然性」は到達可能なすべての世界において「 $\phi a$ であれば、 $\Box \phi a$ 」と表現された。aがこれら到達可能な世界で同一であることは前提されていた。ところが以下のP2を見れば明らかのように、対応者理論では世界間での個体の同一性は破棄され、ルイスは代わりに「対応者である」という関係を導入する。

様相論理と同等程度の表現性を得るために、彼は次の8つの公準を立てる。

P1 :  $\forall x \forall y (Ixy \rightarrow Wy)$  (何物も世界の中に、存在する)<sup>3</sup>

P2 :  $\forall x \forall y \forall z (Ixy \wedge Ixz \rightarrow y=z)$  (何物も二つの世界には存在しない)

P3 :  $\forall x \forall y (Cxy \rightarrow \exists z Ixz)$  (対応者は少なくとも一つの世界の中に存在する)

P4 :  $\forall x \forall y (Cxy \rightarrow \exists z Iyz)$  (対応者を持つ物は少なくとも一つの世界の中に存在する)

P5 :  $\forall x \forall y \forall z (Ixy \wedge Izy \wedge Cxz \rightarrow x=z)$  (何物も同じ世界で他の物の対応者にはならない)

P6 :  $\forall x \forall y (Ixy \rightarrow Cxx)$  (世界の中に存在する物はすべて、自身の対応者である)

P7 :  $\exists x (Wx \wedge \forall y (Iyx \equiv Ay))$  (その中の物がすべて現実であるような世界が存在する)

P8 :  $\exists x Ax$  (何物かは現実である)

またP7の記述を省略して、現実世界は次のように定義される。

$@ =_{\text{def}} \exists x \forall y (Iyx \equiv Ay)$

「対応者関係」とはいかなる関係であろうか。直観的に説明すれば、世界間で存在者の同一性を保持しないが、類似性によって対応付けられるような関係と言える。世界 $W_1$ における $W^*$ のソクラテスの対応者は、世界 $W_1$ で何者よりも、 $W^*$ のソクラテスに似ているのである。

対応者関係は通常、推移的ではない。世界 $W_1$ の個体 $x_1$ が $W^*$ のソクラテス(s)と様々な点で類似していて、さらにまた世界 $W_2$ の個体 $x_2$ が世界 $W_1$ の個体 $x_1$ と様々な点で類似しているとしよう。「類似している」を「同一である」と読み替えると、推移律により、 $s=x_2$ が言える。しかし対応者関係の特徴付ける類似性の観念によれば、ソクラテスと個体 $x_2$ の間に類似性が見られるとは限らないため、対応者関係が成立する保証はない( $\neg Cx_2s$ )。

また対称性も、通常成立しない。世界 $W_3$ の個体 $x_3$ をグリム兄弟両者の混ぜ合わさった存在者としてよう<sup>4</sup>。個体 $x_3$ が世界 $W_3$ で何者よりも、 $W^*$ のグリム兄弟に似ているとき、 $x_3$ は兄弟両方の対応者であり、従ってヤーコブ・グリム ( $y$ ) の対応者となる ( $Cx_3y$ )。しかしヤーコブよりもヴィルヘルムの方が、わずかに $x_3$ に類似していたとしよう。この場合、ヴィルヘルムが $x_3$ の対応者となり、ヤーコブは $x_3$ の対応者 ( $\neg Cyx_3$ ) とならない。

ルイスはまた、対応者をもたない存在者 ( $\exists x \neg \exists y Cyx$ ) や、何者の対応者でもない存在者<sup>5</sup> ( $\exists x \neg \exists y Cxy$ ) も容認する。最も $a_4$ に類似する存在者を他の世界で選び出しても、その個体は $a_4$ の対応者とは言いがたいとき、また世界 $W_5$ には他の世界で類似することのない個体 $x_5$ が存在するときである。

## 2. 様相論理の対応者理論への翻訳

こうした基礎概念の哲学的意味合いについては後に検討することとして、次に様相論理の対応者理論への翻訳がどのようになされるのか見ておこう。ルイスによれば、様相量化論理の混迷度に比して、対応者理論では問題の骨子がよりはっきりすると言う。様相論理は内包的であるが、対応者理論はそうではない。どの個体がどの個体の対応者であるかを決定できればそれで済むわけである。さらに様相論理の式はすべて対応者理論の式へと翻訳可能であるが、その逆は満たされない。従って対応者理論は、様相操作子を伴う論理体系よりも豊かな表現力を持つと言われる。

$\phi$  が閉じた式の場合、 $\Box \phi$  と  $\Diamond \phi$  はそれぞれ次のように翻訳される。世界  $\beta$  で  $\phi$  が成り立つことを  $\phi^\beta$  と表す。

$$\Box \phi \quad / \quad \forall \beta (W\beta \rightarrow \phi^\beta)$$

$$\Diamond \phi \quad / \quad \exists \beta (W\beta \wedge \phi^\beta)$$

$\phi$  が 1 変数述語の場合は、次の通りである。

$$\Box \phi \alpha \quad / \quad \forall \beta \forall \gamma (W\beta \wedge I\gamma \beta \wedge C\gamma \alpha \rightarrow \phi^\beta \gamma)$$

$$\Diamond \phi \alpha \quad / \quad \exists \beta \exists \gamma (W\beta \wedge I\gamma \beta \wedge C\gamma \alpha \wedge \phi^\beta \gamma)$$

$\phi$  が多変数の場合、各々の  $\alpha_n$  の対応者  $\gamma_n$  と、その世界  $\beta$  について、同様の仕方で翻訳を与えればよい。

この翻訳方法に従うと、「『 $\alpha$  について  $\phi$  が成立する』は必然的である」は、「いかなる世界  $\beta$  においても  $\gamma$  は  $\beta$  の中にあり、かつ  $\gamma$  は  $\alpha$  の対応者であるとき、 $\alpha$  の  $\beta$  中の対応者  $\gamma$  について  $\phi$  が成立する」と同義であることが見て取れる。

なお様相操作子を含まない式については、次のように量化領域を現実世界に制限すればよい<sup>6</sup>。

$$\forall x Fx \quad / \quad \forall x (Ix @ \rightarrow Fx)$$

ところで対応者理論は、指示的な不透明さや本質主義へのコミットメントを含むのであろうか。単称名辞  $\alpha$  は  $\hat{\alpha}(\phi \alpha)$  と変形され、 $\zeta$  について妥当であるような記述へと書き換え可能であると、ル

イスは述べている。そして記述は、ラッセルに従えば、解体変形されて真偽を問い得る文中に現れるのである。このときスコープの及ぶ範囲に応じて、記述は第一義的あるいは第二義的な現われを見せるが、対応者理論においても相当する区別を表現できる。

$\phi$ によって表現される性質が $\zeta$ の本質を表していると思なされるのは、 $\Box\phi\zeta$ における $\zeta$ が第一義的に出現すると解釈される場合である。これは対応者理論ではどのように表現されるのであろうか。本質と対応者は互いに異質な概念なので、相互に定義することはできないが、その対応者のすべて、そしてそれだけがその性質を持つとき、これを本質的性質であると言ってよい。記号的表現を与えると、

$$\exists\alpha (I\alpha @ \wedge \forall\delta (I\delta @ \rightarrow \phi^{\alpha}\delta \equiv \delta = \alpha) \wedge \forall\beta \forall\gamma (I\gamma\beta \rightarrow C\gamma\alpha \equiv \phi^{\beta}\gamma))$$

となり、これは「 $\gamma$ が $\alpha$ の対応者であるのは、現実世界には $\phi^{\alpha}\alpha$ であるような唯一の個体 $\alpha$ が含まれ、かつあらゆる世界 $\beta$ における $\alpha$ のどの対応者 $\gamma$ も、 $\phi^{\beta}\gamma$ であるときそのときのみである」と読めることが分かる。なお対応者 $\gamma$ はあくまで $\alpha$ とは別の個体なので、ここでは世界に相対化された述語 $\phi$ 、 $\phi$ がそれぞれ使用されている。

対応者理論にも難点は見られる。例えば必然的存在を表す式 $\forall x\Box\exists y(x=y)$ は、いつでも真となる。対応者理論に基づいて解釈すれば、 $x$ は様相操作子によって束縛されていないので、 $x$ への量化は現実世界に制限されていることになる。そして $x$ と同一であるもの、すなわち自分自身がその世界に存在することは当然である。このため $x$ が他の世界で対応者を欠いているときでさえ、現実存在する対象の必然的存在が言えてしまうのである。クリプキ流の意味論では必然的存在は成り立たない。

### 3. 様相論理の諸定理との関係

様相論理では到達可能性関係 $R$ のいかんによって許される公理が異なってくる。ルイスの対応者理論においても、対応者関係 $C$ をどのように考えるかに依存して異なる体系が成立する。

$$(4) \Box\phi \rightarrow \Box\Box\phi$$

式(4)の対応者理論への翻訳は、 $\phi$ が閉じた文でない限り、定理ではない。しかし対応者関係が推移的であるとすれば、(4)は定理として成立する。

$$(B) \phi \rightarrow \Box\Diamond\phi$$

式(B)の翻訳も、 $\phi$ が閉じた文でない限り、定理ではない。しかし対応者関係が対称的であるとすれば、定理として成立する。

- $a_1=a_2 \rightarrow \Box a_1=a_2$  ( $a_1$ と $a_2$ は同じ変項ではない)

上記式の翻訳は定理ではないが、どの世界における個体も他の世界に唯一つの対応者を持つときに成立する。

$$(バーカン式) \forall\alpha\Box\phi\alpha \rightarrow \Box\forall\alpha\phi\alpha$$

バーカン式も定理ではないが、どの二つの世界をとっても、一方の世界におけるいかなる個体も

う一方の世界の何者かの対応者であるときに成立する。

- $\exists \alpha \Box \phi \alpha \rightarrow \Box \exists \alpha \phi \alpha$

上記式の翻訳も定理ではないが、どの二つの世界をとっても、一方の世界におけるいかなる個体ももう一方の世界に対応者をもつときに成立する。

(逆バーカン式)  $\Box \forall \alpha \phi \alpha \rightarrow \forall \alpha \Box \phi \alpha$

逆バーカン式は定理である。

- $\Box \exists \alpha \phi \alpha \rightarrow \exists \alpha \Box \phi \alpha$

上記式の翻訳は、もっともらしいどのような仮定を加えても、定理とはならない。

## II. 対応者理論と様相実在主義—その形而上学的性格—

可能性や必然性また反事実に言明にどのような表現を与えるかを巡って、ルイスの示した対応者理論は技術的には優れていると言える。しかしその定式化を文字通り受け止めるには、さらなる十分な論拠を必要とするだろう。後年の『世界の複数性について *On the Plurality of Worlds*』(1986)は、自らが与えた体系に形而上学的な説明を試みたものである。ここでは世界が複数存在することは自明とされ、そのうえでこのテーゼを擁護すべく議論が進められていく。

### 1. 諸々の世界は代替世界ではない

ルイスは世界の複数性を主張し、しかもそれぞれの世界は具体的であると述べている。俄かには信じがたい見解ではあるが、これを文字通り受け止めるべきであるという。

我々の住む世界とは別の世界を、抽象的な実体による表象 (representations) として把握する立場を、彼は代替様相実在主義 (ersatz modal realism) と呼び、批判している。代替主義者は、複数の具体的な世界という主張に賛意を示さない。彼らによれば、存在するのは一つの世界のみであり、我々は、この世界がそうであり得た様々な仕方を表す抽象的な実体 (物語、像など) を有するのである。従って、代替様相実在主義は、何が存在するかという点では常識と対立するものではない。

ルイスは代替様相実在主義を3つの形態に分類している。(1) 代替世界は物語・理論、あるいは言語的構成物のようなものであり、規約によって与えられた意味において表れる (represent) とする言語的代替主義 (linguistic ersatzism)。(2) 代替世界は像のようなものであり、その同型性によって表れるとする描像代替主義 (pictorial ersatzism)。(3) 代替世界がどのようにして表れるかを述べる手立ては何もなく、それはただ表れるだけであるとする魔術的代替主義 (magical ersatzism)。

これらの立場はそれぞれに長所もあれば、短所もあるため、一律にその説得力を殺ぐような反論を展開できるわけではない。しかしルイスはその一つひとつを検討し、代替主義を退ける。

言語的代替主義には、3つの問題がある。第一に、矛盾しているような世界は存在しないにも関わ

らず、世界を描写する幾つかの記述は矛盾し合うことである。第二に、不可識別の世界、あるいはいづれにしても相互に識別できない世界部分が存在するはずであるが、我々は不可識別の記述を持ち得ないことである。第三に、世界はそれを記述する手段を超えて存在し得る一方、記述され得るものは、我々がそれについての語を持ち得るものに限られるということである。

描像代替主義も、3つの問題を有する。第一に、描像代替主義は原初の様相を必要とする点である。描像主義者の定式化では、しゃべるゴリラのいる代替世界が存在するときのみ、しゃべるゴリラは存在し得る。何かを代替のしゃべるゴリラとするものは、その何かは、具体的なこの世界の部分であるしゃべるゴリラの同型であり得るということであり、これは循環である。第二に、言語的代替主義と同様、不可識別の像をどのように区別するのかという問題がある。第三に、ルイスの掲げる具体的・抽象的の区別に従えば、描像代替世界は、その擁護者の意図に反して、抽象的とはならず、具体的となってしまう。

魔術的代替主義は、上記2つとは性格を異にする。代替世界は内的な構造を持たず、従って構造を形作る何らかの要素によって与えられるのではない。魔術的代替主義によれば、世界はメレオロジカルで原子的であり、部分を持たない。しかしこの場合、個体が性質を持つとはいかなることかを説明することが困難になる。

ルイスの立場は、何であれ代替世界を主張するものではない。彼の言う様相实在主義の特徴を以下に述べていこう。

## 2. 孤立性

それぞれの世界は独立している。このことを説明するため、ルイスはワールドメイト (worldmates) と名付ける個体の関係を導入する。二つの個体が同一の世界の部分であるならば、その二つはワールドメイトである。世界とはその部分を構成するすべての個体のメレオロジカルな和 (sum) のことであり、ワールドメイトである個体の最大値のことである。またルイスは世界が重なり合うことを認めていないように見えるので、ワールドメイトである世界部分は異なる世界のワールドメイトにはなり得ず、従って同じ世界の部分でしかない。

では個体や世界部分がワールドメイトである条件は何であろうか。ルイスによれば、その充分条件は、与えられた個体や世界部分が時空的に関係付けられている (spatiotemporally related) ことである。例えばある時点からは相違が生じたが、それまでは見かけ上同一でいわば完全な複製となっている二つの世界部分は、時空的な関係を持つと言えるだろうか。この二つの世界間には、対応者となっている世紀・週・秒、あるいは銀河・惑星・町などが存在する。一方の世界部分である個体は、その対応者となっており他方の世界部分でもある個体と同じ町にいるかもしれないし、そうでないかもしれない。しかしルイスは、このような関係を本来の時空的關係とは認めない。またルイスは、すべての可能な個体をその部分として含む極端に大きな「世界」や、ニュートリノのみからなる非常に小さ

な「世界」を認めない。

時空的に関係付けられていれば、与えられた個体はワールドメイトである。今度はその反対に、ワールドメイトであれば与えられた個体は時空的に関係付けられたことになるのか考えてみよう。この条件をより深く考察するために、種々の世界-様部分 (world-like parts) を持つ一つの大きな世界を想定する。ルイスは一つの世界内での非連結的な時空 (disconnected spacetime) をそもそも認めないので、便宜的に種々の世界-様部分が関係付けられるような世界を導入する。この想定に従えば、世界-様部分同士は便宜的にワールドメイトとなる。そしてそれらの時空は非連結的ではあるが、世界-様部分同士は何らかの時空的関係を有するのである。この大きな世界が取り得る形態は以下の4つである。しかしルイスはこのような世界の形態を認めない。

- (1) この大きな世界の時空はもう一つの次元を持っていて、5次元である。そして種々の世界-様部分は、このもう一つの次元に沿って広がっている。
- (2) 世界-様部分は通常の時空を共有している。この一つの世界の中で相互作用を有しないが、互いに浸透し合っている。この場合それぞれの住人はその時空の形に働きかけないが、間接的に他の世界-様部分に作用することを許す。
- (3) 時間は一方向へ伸びる実線ではなく、両端を持つ実線の写しから構成されている。それぞれの時代は無時間的に把持され、始まりもなければ終わりもない。異なる時代の住人は時空的には関係付けられるが、その隔たりは無限である。
- (4) 時間は一方向へ伸びる実線であるが、先へ進むにつれて一時代の持続が短くなる。例えば最初の時代は12か月持続し、その次からは6か月、3か月と短くなっていくとすれば、2年間のうちに無限に多くの世代が入り込むことになる。

時空外にあるような精神によって、複数の世界が占められている可能性はないのだろうか。しかしルイスによれば、精神による世界の相互関係は、我々自身の世界における相互関係よりもより緩やかな関係なのである。ルイスはその偏在性により他の事物と時空的に関係付けられる精神を否定していない。というのも、偏在性によるそのような関係は確かに事物と時空的関係に立つ一つの仕方に違いないからである。けれどもこうした関係に対しては、ふさわしい論理空間内に場所を与えるのみに留まっている。

また無が存在するという立場も退ける。世界とは時空的に関係付けられたメレオロジカルな和の最大値なので、空である（無である）世界は存在しない。世界はビールを注いでおくためのジョッキのようなものではない。個体としてのビールがなければ、何物も存在しないのであって、その容器であるジョッキが残っていたりはしないのである。

一つの世界内では、与えられた個体が時空的関係にあればワールドメイトであるし、ワールドメイ

トであれば時空的関係にあると言ってよい。しかし時空的関係とはいかなる関係なのであろうか。我々のいるこの世界と同様の時空的関係でもって、他のそれぞれの世界のワールドメイト同士が関係付けられているとの保証はどこにもない。

一つの世界内でワールドメイトを結びつける関係の条件として、ルイスは4つ挙げている。(1) 自然(natural)であること。(2) 全体に広がっている(pervasive)こと。(3) 識別的である(discriminating)こと。(4) 外的である(external)こと。そしてこれらを満たす関係はやはり我々の世界の時空的関係に類似しているのである。

さらに諸世界は因果的にも独立している。因果的独立性は、先ほどの時空的関係という世界を境界付ける原理の一つとして導入されるわけではないが、反事実的状況を考察すれば、諸世界の因果的独立性は諸世界間の自明な性質として帰結する。

一つの世界Wにおいて出来事Cが出来事Eを引き起こすとき、世界W内で出来事Cと出来事Eは因果関係にある。反事実的状況とは、世界Wによく似た出来事Cの生じない世界では、出来事Eもまた生じないということを意味している。

さて貫世界的な因果関係を考察するために、出来事Cは世界WCで生じ、出来事Eは世界WEで生じるという状況を考えよう。そして出来事Cが生じなければ、出来事Eも生じないとする。このときこの反事実的状況はどこで成り立つのだろうか。次の四つの場合が考えられる。

(1) 世界WCとよく似た出来事Cの生じない世界においては、出来事Eもまた生じない。

しかし我々は貫世界的因果関係を表現したいのだから、世界WCとよく似た世界で出来事Eが生じていないとしても、これは本来得るべき表現ではない。因果関係の影響下にある世界WEとよく似た世界を目指すべきなのである。

(2) 世界WEとよく似た出来事Cの生じない世界において、出来事Eもまた生じない。

これも適切ではなく、我々は世界WCと似た世界から出来事Cを取り除くことを仮定していたのだから、世界WEと似た世界から出来事Cを取り除くことでは貫世界的因果関係を表現できていない。そもそも出来事Cの生じていない世界WEとよく似た世界とは、世界WE自身でさえあり得るだろう。

(3) 世界-組<WC, WE>とよく似ているが、その組の最初の方では出来事Cの生じないような世界-組において、出来事Eはこの世界-組の第二では生じない。

この表現は有意味である。しかし真となるような仕方では意味をなさない。ある世界-組が別の世界-組に似ているならば、その二組の最初の世界が似ているだけでなく、第二の世界も似ているはずである。我々は出来事Cを取り除かねばならないのだから、世界-組<WC, WE>の最初の一つとよく似た世界に至るため、世界WCから出発せねばならない。しかしよく似た世界-組の第二の世界は出来事Eの生じる世界WEである。従って、(3)は偽である。おそらく(3)によって表現したい事柄とは、次の(4)なのである。



(4) 我々自身の世界とよく似ているが、世界WCに対応する部分では出来事Cの生じないもう一つの大きな世界において、出来事Eは世界WEに対応する部分においては生じない。

これも誤りである。可能世界の全体を一つの大きな世界と考え、この大きな世界にそうであり得た別の仕方があると考えている。しかし、ある出来事の不成立がもう一つの出来事を不成立にするという偶然性は、すでにそれぞれの世界が備えている。より大きな世界という別の尺度を持ち出してくることはナンセンスである。

このように貫世界的因果関係は存在しない。そしてこのことがまた他の世界を観察したり、旅したりすることの不可能性を示すのである。

望遠鏡で観察することは、情報を集める他の方法と同様に、因果的な過程である。「観察された」物質の条件から因果的に独立した像を生み出す『望遠鏡』は、いんちきの望遠鏡である。貫世界的因果性がないのだから、貫世界的な望遠鏡も存在しない<sup>7</sup>。

### 3. 具体性

ルイスは世界が複数存在することを認める。そして他の世界は我々の世界と同じように具体的な個物からなる具体的な世界なのだと言う。我々の身の回りにあるものだけが唯一具体的と呼ばれるのではないとすれば、「具体的である」——そしてその反対として「抽象的である」——とはどのような性質なのであろうか。以下は具体的-抽象的の両軸に区別を与えると思われる方法である。

(1) 例示する方法。具体的なものとは、例えばゴリラや水溜り、星、陽子などであり、抽象的なものとは数のようなものを言う。しかし数とは何か？ 抽象物とされる数とは、世界のここやあそこで例証化される構造的普遍者 (structural universals) なのであろうか。数について有益な説明を得ても、数はそこらにいるゴリラときわめて多くの仕方で違っている。ゴリラのようなものと数のようなものを分ける境界線をどこに置けばよいか、依然として不明確なままだろう。

この方法はゴリラや水溜り、星などの典型的な具体物を挙げていく点では問題ない。しかし個物が(非時空的)部分としての普遍者を含むというような場合、世界の部分すべてが具体的であるとはいえない。例えば数3を三分割性 (tripartiteness) の構造的普遍者と主張する数理論によれば、世界のある部分は抽象的となる。

ゴリラや水溜りに比べてその極端な大きさの違いにもかかわらず、世界そのものは、ルイスによれば、具体的である。しかしルイスはなぜ世界が具体的なのか説明できないという。

(2) 合成する方法。具体と抽象の区別は個体と集合、あるいは個物と普遍者の差異である。ゴリラは個体または個物であり、集合や普遍者ではない。しかし個物の集まりであるはずの世界は、ルイスによれば、普遍者ではなく具体的な個物である。このため具体と抽象の差異を個体-集合あるいは個物-普遍者の差異へと還元できないのである。

(3) 何らかの否定による方法。具体物は時空間的な位置を持つが、抽象物は位置を持たないとする。この場合、集合は抽象物とされる。しかし集合は位置を持つものの集合 (a set of located things) であり、分割された位置 (divided location) を持つことになるので、位置を持つことに変わりはない。例えば私とあなたの集合は、部分的には私のいるここにあり、そしてまた部分的にはあなたのいるむこうにある。普遍者を抽象物と考えても同様であり、普遍者はそれが例証化したそれぞれの個物の場所に位置を持つのである。

因果的相互関係を持たないことが、抽象物を区別すると考えてはどうか。しかし何かが結果の集合を引き起こしたり、原因の集合が何かを引き起こしたりすると考えられる。出来事をそれが生じる時空間地点の集合と同一視すれば、この集合は因果関係を持つと言えるからである。従って、普遍者あるいは抽象物としての集合を、具体物と区別できていないのである。

他の方途は、抽象物は相互に識別可能ではないというものである。識別不能な普遍者については検討するまでもない。識別不能な二つの個体を引き合いに出せば、その単元集合は識別不能であるだろう。識別不能な個体によって構成された集合は、識別不能な集合となるだろう。しかし、もともと識別不能なのは個体なのであるから、この基準により具体・抽象を区別できるとは言い難い。

ところで他の諸世界は時空間的あるいは因果的な関係を有するのだろうか。同じ自分自身の世界の別の部分については、時空間的な関係や因果的な関係をもち得る。しかし自分自身の外の世界に対してはそのような関係をもち得ない。時空間的な位置を持たないことや因果関係を有さないという基準によっては、具体・抽象の区別を与え得なかったのだから、世界はその部分から具体性を受け継ぐと考える余地がここにはあるだろう。

(4) 抽出 (abstraction) による方法。この方法は抽象物が具体物から抽出されると言う。抽出物とはものの特徴を取り除いたりすることなく、むしろある特徴を複合した結果である。もともとの具体物の不完全な記述は抽出物の完全な記述となる。

同値類 (equivalence class)<sup>8</sup>によって抽出物を取り出してみよう。方向をその直線とその直線に平行な他のすべての直線のクラスと考え、与えられた直線からその方向を抽出する。このとき直線の特徴であるところの何かを取り除いたりすることなく、もともとの直線から方向という抽象物を手にするのである。

ルイスによれば、世界は個物のメレオロジカルな和であり、具体的である。抽出によるこの方法のみが世界の具体性を残しつつ、具体物・抽象物の区別を与える唯一のやり方なのである。

#### 4. 豊富さ

世界は複数存在する。ではいくつの世界が存在するのか。世界の豊富さを言うため、ルイスは再結合の原理 (principle of recombination) を要求する。これは異なる可能世界の部分を組み合わせて、もう一つの世界を得る手段である。

この原理はいかなる個体も他の個体と共存 (coexist) し得ると言う。またいかなる個体についても他の個体と共存しない可能性を認める。例えばドラゴンが存在しユニコーンも存在するが、ドラゴンとユニコーンが隣り合わせで存在し得ないとすれば、このことは論理空間における受け入れがたい隙間すなわち豊富さの欠如を表す。

しかしルイスは、「いかなる個体も他の個体と共存し得る」という定式化をそのまま容認するわけではない。彼は世界が重なり合うことを認めないので、一方の世界のドラゴン自身と他方の世界のユニコーン自身は、ドラゴンの世界においても、ユニコーンの世界においても、あるいはまた第三の世界においても共存しない。

また「何かの対応者は他の何かの対応者と共存し得る」という定式化をいつでも容認するわけではない。対応者関係は類似性によって特徴付けられるが、それは外的な類似性、特に起源の類似性によって特徴付けられる。このように対応者関係は外的な側面を考慮に入れるのだから、その取り巻く環境まで考えねばならない。そしてその取り巻く環境がもとのドラゴンのいる世界と大きく異なる世界では、ドラゴンの対応者は存在しないだろう。同様の場合、ユニコーンの対応者も存在しないだろう。このとき、もとのドラゴンのいる世界とユニコーンのいる世界に一致する一つの世界は存在しないだろう。従って、ドラゴンの対応者とユニコーンの対応者は共存し得ないことになるのである。

しかしいずれにしても、ルイスは再結合の原理を定式化する方途を探す。そして「ドラゴンのような何かとユニコーンのような何か共存する世界が存在する」という表現を選ぶ。これら両者は何かの対応者ではない。こうした個体をルイスは複製物 (duplicate) と呼ぶ。ルイスはあくまでも、もとの個体でもなく、その対応者でもない複製物を持ち出し、これによって世界の豊富さを保証しようとする。とはいえ、「互いに重なり合わない」という世界の孤立性と、この再結合の原理はどのように調和をとれるのか疑問である<sup>9</sup>。

再結合の回数を無制限に認めるとすれば、不都合が生じる。例えば一匹のドラゴンを無限にコピーしていけば、我々に許容できる時空の大きさを越えてしまうだろう。世界は個体の複製物によって満たされているということへの唯一の制限は、その世界の諸部分は許容される時空の大きさや形の中で組み立てられていなければならないというものである。

可能性と想像力はどのような関係にあるのだろうか。その完全な詳細を一度に与えるのでないとなれば、我々は不可能なものを想像し得る。正19角形はコンパスと定規では作図不可能であるが、我々は直線と弧による鉛筆の跡として正19角形を想像し得る。各辺の長さ等その詳細までを一度に描くわけではなく、また実際に作図をするように直線と弧を順番に描き、そしてしかもその不可能性に気付き損ねるというわけではない。このように想像による方法は、可能性に至るには不十分なやり方である。

再結合の原理は自然法則の必然性についてもある見解をもたらす。例えばパンを食べるということの後に、飢餓するということの続く世界を考える。この世界では食事による栄養は命をつなぐという

法則が侵害されている。ルイスによれば、自然法則の必然性は一つの世界内ではいつも必ず妥当するが、他の世界と比較すれば必ずしも成立するわけではない。

存在する可能的個体としては、この世界の部分であるものやこの世界の部分の複製であるもの、さらにはこの世界のいかなる部分の複製でもないが部分のそれぞれがこの世界部分の複製であるものが考えられる。しかしルイスは「エイリアン」と名付ける可能的個体を認める。この世界にとってのエイリアンの個体 (alien individual) とは、そのいかなる部分もこの世界の部分いずれの複製へも分割不可能な個体のことである。

またこの世界にとってのエイリアンの属性とは、この世界のいかなる部分によっても例証化されていない属性のことであり、かつこの世界に例証化されている属性の一部から組み合わせたりその構造を取ったりすることによっても定義できない属性である。しかし非エイリアンの属性でもエイリアンの仕方でも組み合わせるとすれば、エイリアンの属性を持たないが、この世界の我々にとってのエイリアンの個体が存在することになる。正の電荷と負の電荷が両立可能である世界を考えれば、この世界から見てエイリアンの属性を持たないエイリアンの個体が存在することになる。

いかなる個体や属性に対してもエイリアンとならない世界は十分に豊かな世界である。しかし我々の世界がそのように豊かな世界であるという保証はない。従ってこの世界部分からの再結合によってすべての世界を把握できるとは限らない。非エイリアンの属性をエイリアンの仕方でも組み合わせることだけでは、エイリアンの個体の可能性すべてを把握したことにはならないのである。エイリアンの個体という可能性の豊富さをすべて捕らえるのでなければ、再結合の原理は不十分であろう。

再結合の原理はエイリアンの世界にも適用される。(我々にとっての) エイリアンの個体は (我々にとっての) 他のエイリアンの個体と共存し得るし、また共存し損ね得る。ただし時空の形と大きさについては前述の制限が付される。

## 5. 現実性

我々の世界は現実の世界である。そしてルイスによれば、他の多くの世界も現実の世界である。彼は「現実の (actual)」という語を、「この世界の (this-worldly)」という語と同様に使用する。ある人が自分のいる世界を指して、「我々の世界は現実の世界である」と述べるとき、その人は自分のいる世界とそのワールドメイトに対して「現実性」という語を適用しているのである。

我々の世界が唯一の「現実の」世界ではあり得ないのだろうか。我々の世界のみがある特徴を有し、その世界の住人とその世界自身が絶対的に区別されるような特徴を指して、これを「現実の」世界の特徴と呼んではいけないのだろうか。

ルイスはこのような見解には当然ながら否定的である。他の世界に存在する個体は現実性を欠いており、選ばれた数少ない我々だけが絶対的な現実性を有していることになるが、我々が数少ない選ばれた存在者であると知り得るすべはないのだと言う。

「現実の・に」は発話の脈絡に応じてその指示対象を変えるので、実は指標詞なのである。そして固定指標詞としても機能するし、非固定指標詞としても機能する。あるいは両方の機能が同時に使用されることもある。

「現実には存在しない誰かがいる」という文では、副詞「現実には」は固定的に使用されている。すなわちこの世界を指している。「存在していないが、現実には存在し得た人がいる」という文では、非固定的に使用されている。ここでの副詞「現実には」は特にこの世界に限定されず、当の存在し得た人物の考えられている世界を指している。さらに「現実ではない人物が現実であり得る」という文においては、文頭の「現実」はこの世界を、文中の「現実」は当の人物の存在する世界を指しているため、両方の機能が同時に使用されているのである。

### Ⅲ. 対応者理論は様相論理の代替物か？

ファラとウィリアムソンは、現実世界に対応者を持たない個体や、現実世界に複数の対応者を持つ個体を巡って、対応者理論の論理的な表現力に対して疑問を呈している<sup>10</sup>。

ルイスは対応者理論の長所として、その外延性と、様相量化論理と比較した場合の豊かな表現力を挙げている。しかしファラとウィリアムソンによれば、ルイスの対応者理論は、様相に関わる言明を表現するには、十分な機能を有していないのである。

彼らはまず、通常の様相量化論理は現実性操作子を含むのでなければ、様相に関する言明を十分に表現できないと主張する。例えば、

- (1) 事実金持ちの人々が、貧乏だということはある得る。

という文は、現実性操作子 (*ACT*) を導入し、次のように表される。

- (2)  $\Diamond \forall x (ACTRx \rightarrow Px)$

ここで現実性操作子の真理条件は、以下の通りである。

- *ACT*  $\phi$  は、現実世界で  $\phi$  が真であるそのときのみ、世界 *w* で真である。

さて、どのようにして現実性操作子を含む様相論理式を、対応者理論の言語へ翻訳すればよいだろうか。ファラとウィリアムソンは三つの候補を挙げている。

- (L1)  $(ACT \phi (a)) \forall is \exists x (Ix@ \wedge Cxa \wedge \phi^@ (x))$

( $\phi$  は、*a* の幾つかの現実世界の対応者について、現実世界で成立する。)

- (L2)  $(ACT \phi (a)) \forall is \forall x [(Ix@ \wedge Cxa) \rightarrow \phi^@ (x)]$

( $\phi$  は、*a* のすべての現実世界の対応者について、現実世界で成立する。)

- (L3)  $(ACT \phi (a)) \forall is [Qx:Ix@ \wedge Cxa] (\phi^@ (x))$

(*a* の *Q* 個の現実世界の対応者は、現実には  $\phi$  である。)

しかし、彼らによれば、以上のいずれの翻訳も成功していない。現実性操作子を伴う様相量化論理

としては妥当でない式が、対応者理論の式へ翻訳されると、(L1) ~ (L3) のいずれに従おうとも、成立してしまう場合が見つかるのである。

このように様相の表現には現実性操作子が必要であるとすれば、対応者理論は満足のいく表現とは考え難いであろう。

#### IV. 様相実在主義は哲学的に健全か？

これまで検討してきたように、可能世界の存在を文字通り受け止めることの犠牲は大きい。ローゼンは、存在論的にまた認識論的に、より穏健な理論を展開している<sup>11</sup>。

エドは青い白鳥の存在を信じていない。しかし、そのような個物は存在し得たかもしれないと信じている。可能世界に基づいて、この様相的言明を定式化すれば、

(1) 青い白鳥がいるような世界Wがあるならば、そのときのみ、青い白鳥はいるかもしれない。となるだろう。そしてこれは、非現実の可能世界が存在するという信念へ接近することである。可能世界とは抽象的な表象物であろうか。あるいは可能世界は文字通り実在するのであろうか。いずれにしても、エドは可能世界の存在を信じない。「青い白鳥のいる世界がある。しかしながら、可能世界の存在を信じない」と、矛盾なく一息に発言できる立場はないのであろうか。

エドの言う「青い白鳥」は、単刀直入に存在汎化を述べているように見える。だがローゼンによれば、これは文(2)と同種の言明なのである。

(2) ベッカー通り221bには、聡明な探偵がいる。

単刀直入な存在汎化として受け止めれば、(2)は偽である。またこの言明をなす人は誰でも、偽である発言として理解されるべしという意図を持っている。とはいえ、(2)の発言を適切とする会話の脈絡が存在するだろう。シャーロック・ホームズのお話(stories)の中では、(2)は真となる。すなわちこの会話に参加する人は、これを互いにお話として受け止め、むしろ(3)の省略として理解する。

(3) ホームズのお話では、ベッカー通り221bには、聡明な探偵がいる。

暗黙になっていた接頭辞「ホームズのお話では」を補うことが適切な脈絡では、(2)の発言は真となる。ここで重要なのは、(2)や(3)がある脈絡では真であるということではなくて、ベッカー通りの探偵という存在を信じることなく、この発言をできるということである。

「お話Fでは」、あるいは「しかじかのお話に従えば」という形式の文操作子を、ローゼンは、「物語接頭辞 story prefix」と呼ぶ。ここに言うお話は、必ずしも文学上のお話である必要はなく、科学理論や形而上学的思弁でもよい。ライプニッツの単子論に従えば、ラッセルは、その机を心的存在の群と考えていたのである。

以上の前置きを踏まえると、ローゼンの「虚構主義 fictionalism」とは、「青い白鳥のいる世界がある」のように表向きあらわれる世界への量化を、物語接頭辞内での量化と解釈することで、可能世界の存在に加担しない立場である。そしてこのときのお話として、彼はルイスの唱える様相実在主義を念頭に置く。

我々の可能世界についての言明は、事実存在するものについての言明ではなく、むしろ、堅固な宇宙の計り知れない複数性という実在主義者の仮定に従えば存在するものについての言明として、理解されるべきであると、虚構主義者は説く<sup>12</sup>。

従って、虚構主義者の語る「青い白鳥のいる世界がある」は、接頭辞「世界の複数性という仮定に従えば」を補って、「世界の複数性という仮定に従えば、青い白鳥のいる世界Wがある」と読まねばならない。一般に、Pを任意の様相命題とおくとき、様相実在主義の観点からは、可能世界の言語を用いた非様相的命題 $P^*$ を得る。このとき実在主義者の図式は、「 $P$  iff  $P^*$ 」となる。虚構主義者の図式は、「 $P$  iff 世界の複数性という仮定に従えば、 $P^*$ 」である。このように接頭辞を省略したままにすれば、両者は言語表現上区別できない。それ故、実在主義と同様、虚構主義に対しても体系的に真理条件を与えられるのである<sup>13</sup>。

しかし、虚構主義者の依拠するお話としての虚構 (fiction) は、様相実在論とまったく同じというわけではない。ローゼンは、ルイスの様相実在主義における存在論上の核を、7つの命題で定式化している。そしてそれら命題を、虚構主義者の依拠する仮定として、ひとまず採用している。ところが7つの仮定の中には、様相的語彙が含まれていないため、すべてのものは現実であるという見解に至る<sup>14</sup>。このためローゼンは「百科事典 encyclopedia」と名付ける仮定を付け加え、我々のいる宇宙の内的特徴に関する非様相的知識を要請する。百科事典によって、我々はこの宇宙が何を含むかを知り、またあるお話に従えば、別の宇宙に何が含まれるかを知るのである。

そもそも我々は、様相的知識をいかにして知るのであろうか。様相実在主義者によれば、我々は経験的知識から順に推論していき、想像によってある状況Pをつかむ。そしてこうしてつかんだ状況Pは、確かに可能な宇宙のある領域についての知識なのである。しかし、進化の過程で偶然備わった我々の心理的な能力が、なぜ様相的知識を把握するに充分であるのか不明である。様相実在主義は認識論上も大きな問題を抱えるが、虚構主義にはこのような問題は生じない。

ともかくお話の真理性を前提していないため、虚構主義は、存在論においていかなる大きな改定も必要としない。その依拠するお話が描いている事物に、存在論的な関わりを持たない。様相的言明に対する機能が同等であるとすれば、より安全な方策を選ぶべきであろう。

## おわりに

様相実在主義は対応者理論の哲学的基礎であると考え、その形而上学的性格を検討してきた。しかし様相実在主義のみならず、対応者理論でさえ多くの困難を抱えることが明らかになった。

ある理論の哲学的豊かさとは、多くの反論を引き起こしながらも、なお尽きることなく議論を提供する力にあるのではないだろうか。そしてその力は極端な主張であればあるほど、豊かであると思われる。

### <註>

- <sup>1</sup> 本稿は、平成19年度創価大学に提出した修士論文を要約し、修正を施したものである。
- <sup>2</sup> Lewis, David. 1968. “Counterpart Theory and Quantified Modal Logic”, *Journal of Philosophy* **65**: pp.113-126. Reprinted in Loux (ed.)1979. and ,with postscript, in Lewis1983.
- <sup>3</sup> 各公準についての括弧内の説明は、直観的な理解を容易にするためのあくまで非公式な言い換えである。
- <sup>4</sup> ふたつの事物が別の世界に同一の対応者を持つと認めることになる。
- <sup>5</sup> このような個体は、Lewis, David. 1986. *On the Plurality of Worlds*.において、「エイリアンalien」と呼ばれている。
- <sup>6</sup> 様相操作子が文頭に現れていない場合や、多重に現れている場合は、それぞれ次のように翻訳される。  
$$\forall x (F_x \rightarrow \Box F_x) / \forall x ((I_x @ \rightarrow F_x) \rightarrow \forall y_1 \forall x_1 (W_{y_1} \wedge I_{x_1 y_1} \wedge C_{x_1 x} \rightarrow F_{x_1}))$$
$$\Box \Diamond F_x / \forall y_1 \forall x_1 (W_{y_1} \wedge I_{x_1 y_1} \wedge C_{x_1 x} \rightarrow \exists y_2 \exists x_2 (W_{y_2} \wedge I_{x_2 y_2} \wedge C_{x_2 x_1} \wedge F_{x_2}))$$
- <sup>7</sup> Lewis, David. 1986. *On the Plurality of Worlds*. Oxford: Basil Blackwell. P.80.
- <sup>8</sup> 「RをX上の同値関係とする。a∈Xに対して、[a]<sub>R</sub>={x∈X:xRa}をaの同値類または剰余類という」田中一之・鈴木登志雄 2003.『数学のロジックと集合論』培風館 p.44.
- <sup>9</sup> Salmonは、再結合の原理を“implausible”と述べている。Salmon, Nathan. 1988. “Reviewed Work: *On the Plurality of World* by David Lewis”, *The Philosophical Review* **97**. p. 239. なおNolanのdissertationに基づいた著書*Topics in the Philosophy of Possible Worlds*. “chap.VI. Recombination Unbound”は、この点に詳しい。
- <sup>10</sup> Fara, Michael and Williamson, Timothy. 2005. “Counterparts and Actuality”, *Mind* **114**: pp.1-30.
- <sup>11</sup> Rosen, Gideon. 1990. “Modal Fictionalism”, *Mind* **99**: pp.327-354.
- <sup>12</sup> *ibid.* p.332.
- <sup>13</sup> この点については、次の批判がある。Divers, John. 1995. “Modal Fictionalism Cannot Deliver Possible Worlds Semantics”, *Analysis* **55**: pp.81-89.
- <sup>14</sup> 7つの命題は、簡略のため、省略してある。ルイスによれば、すべてのものは一律に存在するのであった。まさにそれ故、ルイスの存在論を定式化した命題群は、すべてのものは現実であるという主張を含むのである。ただし「II.5.現実性」で見たように、ルイスは、現実性は指標性を持つと述べている。ここでのローゼンの意図は、「お話し」と対比された意味で、「現実」を取り出すことにあると思われる。

### <参考文献>

- Divers, John. 1995. “Modal Fictionalism Cannot Deliver Possible Worlds Semantics”, *Analysis* **55**: pp.81-89.
- Fara, Michael and Williamson, Timothy. 2005. “Counterparts and Actuality”, *Mind* **114**: pp.1-30.
- Jackson, Frank and Priest, Graham (eds.) 2004. *Lewisian Themes*. Oxford: Clarendon Press.
- Lewis, David. 1968. “Counterpart Theory and Quantified Modal Logic”, *Journal of Philosophy* **65**: pp.113-126. Reprinted in Loux (ed.)1979. and ,with postscript, in Lewis 1983.
- Lewis, David. 1970. “Anselm and Actuality”, *Noûs* **4**: pp.175-188. Reprinted, with postscript, in Lewis 1983.
- Lewis, David. 1971. “Counterparts of Persons and Their Bodies”, *Journal of Philosophy* **68**: pp.203-211. Reprinted in Lewis 1983.
- Lewis, David. 1973. *Counterfactuals*. Oxford: Basil Blackwell. (吉満昭宏訳『反事実的条件法』勁草書房 2007.)



- Lewis, David.1983. *Philosophical Papers, volume 1*. New York: Oxford University Press.
- Lewis, David. 1986. *On the Plurality of Worlds*. Oxford: Basil Blackwell.
- Lewis, David.1987. *Philosophical Papers, volume 2*. New York: Oxford University Press.
- Loux, Michael J. (ed.) 1979. *The Possible and the Actual*. Ithaca: Cornell University press.
- Nolan, Daniel.P. 2002. *Topics in the Philosophy of Possible Worlds*. New York and London: Routledge.
- Nolan, Daniel.P. 2005. *David Lewis*. Montreal: McGill Queens University Press.
- Rosen, Gideon. 1990. “Modal Fictionalism”, *Mind* **99**: pp.327-354.
- Salmon, Nathan. 1988. “Reviewed Work: *On the Plurality of World* by David Lewis”, *The Philosophical Review* **97**: pp.237-244.
- 田中一之・鈴木登志雄 2003. 『数学のロジックと集合論』 培風館

